


博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 新谷忠彦 

タイ系言語と系統的に関係をもつと見られている“カダイ”諸語は、ベトナムと中国の国境地帯にわずかに点在する“危機に瀕した言語”である。これらの言語はタイ系諸語と関係をもつと同時に、オーストロネシア諸語など、他の言語グループとタイグループを結び付ける言語である可能性も指摘されている。しかし、これらの言語は比較研究を行なうための資料が乏しく、期待されるほど研究が進んでいないのが現状である。こうした現状を打破しようと考えた本論文の著者は、ベトナムのハザン省で3回にわたってそうした“カダイ”諸語の一つであるラチ語の調査を行なった。この調査をもとに、音韻論、形態論、統語論の記述を行なうとともに、ケラオ・ラチ祖語の再構成を行ない、“カダイ”諸語間の系統関係を論じるとともに、タイ・カダイ諸語の系統分類に新たな見解を示そうとしたのが本論文の要点である。

著者が本論文で提供しているラチ語の資料は、有効な資料の少ない“カダイ”系言語のなかにあって極めて貴重な資料であり、本論文が“カダイ”諸語の比較研究の進展に大きく寄与することは間違いない。この点だけをとらえても博士の学位に相当する論文であると判断することができる。また、これまで“カダイ”諸語といわれながらもそれらの言語間の関係がどのように系統論的に整理できるのかあまりはっきりしていなかったなかで、どのように扱えるのかひとつのビジョンを提示している点でも寄与度は大きい。なかでも、“カダイ”諸語のなかで比較的近いと考えられるケラオ・ラチ祖語の韻の再構を行ない、そのケラオ・ラチ祖語を“カダイ”諸語のなかで系統的にどのように位置付けられるかを検討している点など、全体として本論文が当該研究分野に与えた新しい知見に対する高い評価は審査員一同の認めるところである。

一方で審査員のなかから次のような弱点も指摘された。

- (1) 調査に使ったインフォーマントが基本的に一人であり、そこから導き出された言語体系には若干の不安が残る。
- (2) 形態論や統語論の部分は西洋文法概念を脱し切れておらず、付け足しの感がして物足りない。この部分は別論文として深化したらおもしろい結果が得られる可能性がある。
- (3) 先行研究との突き合わせが必ずしも十分に行なわれていない。

(4) 祖語の再構成において、現実に存在する音形を十分に説明できる再構成が求められるが、この点では結論を急ぎすぎている感が否めない。

以上のような弱点を考慮してもなおかつ本論文の当該研究分野に対する寄与度は高く、博士の学位を授与するに価するものと判断できる。また、本著者は既に多くの論文を発表しており、研究者としての資質は十分に認められ、指摘された本論文の弱点についても今後の努力で十分に克服できるばかりでなく、今後の更なる研究成果に大きな期待が持てる。

以上の判断から、審査員全員一致で小坂隆一氏に博士の学位を授与することが相当と認めた。